

「香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学経済学部2年 中井拓海

大学の語学の授業で中国語を選択し1年間勉強をした。その中で、文法事項は学習できても、やはりリスニング・スピーキング能力は実際に中華圏に行き生活をし、実践的に学ぶ方が上達すると考え、自身の中国語能力の向上を目的にこのプログラムに参加した。実際このプログラムを通して中国語の能力を向上たと感じている。

このプログラムでは午前と午後にそれぞれ3時間の授業があり、午前の授業では文法、午後の授業では主にリスニングとスピーキングの学習をした。午前と午後の授業内容は関連性があり、午前の授業でインプットした内容をその日の午後の授業でアウトプットするという形式でとても身についた。また、ほとんど毎日単語テストやディクテーション、スピーキングテストなどがあり、ハードではあったが学習の助けとなった。宿舎は2名1室で、部屋に冷蔵庫があり、シャワーは温水がでるなど概ね快適であった。しかし、シャンプーなどは支給されず、トイレトーパーも初日に1つしか支給されなかった。大学構内にはバスが走っており、宿舎や授業教室の移動に利用した。また、構内にはスーパーマーケットがあり、朝食や飲み物の購入に利用した。

放課後及び休日は基本自由であり、街に出て観光をしながら中国語を使い実践的な活動をした。香港内にとどまらず、深圳やマカオにも足を延ばした。香港中文大学は街中から少し離れた場所にあり、山の斜面を切り崩したような場所、山そのものが大学と言っても間違いではないような場所にある。しかし、香港は地下鉄が発達しているおかげで香港の中心部まで30分程度で辿り着くことができ、さほど不便は感じなかった。

私がこのプログラムに参加した時期はちょうど「反送中デモ」の真最中であり、外務省のサイトやTwitterなどで状況を調べ、デモを避けながらの外出であった。このような時期に渡航したからこそ、逆に海外でいかにして危険を避け自身の身の安全を確保するかを考える良い機会となった。

このプログラムに参加したことによって、進路に対する大きな変化は得られなかった。しかし、中国語を勉強しようという意欲は以前より高くなり、中華圏への渡航意欲も高まった。中国語のレベルはまだまだであるし、知らない単語もたくさんある。香港滞在中にこのプログラムの中国語ができる他の参加者に出会い刺激を受けた。そして何より、中華は食事がおいしい。香港で感じた「もっと他の中華料理も食べてみたい」という思いも私の学習意欲を突き動かしている。

次年度以降の参加者には授業を受けるだけでなく積極的に外出し、実践的に中国語を使う経験をするをお勧めする。